

「イエス・キリストによって生かされて」

マルコによる福音書 14章53-65節

森島 牧人 牧師

今日の聖書には、「最高法院で裁判を受ける」と言う小見出しがあり、「人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。」(14:53・54)と始まります。すでに他の弟子たちは逃げ去り、ペトロが一人遠くから主イエスに従って来ている様子が、印象深く描かれています。

今日の聖書を通して私たちが見るのは、深夜に非常招集された最高法院です。ユダを買収して手引きをさせ、闇に乗じて主イエスを捕らえたユダヤ教の指導者たち、祭司長、長老、律法学者たちが狼狽え、慌てて大祭司の館へ集まって来ている様子が窺えます。なぜこんなことになっているのか。単に宗教的、政治的な敵を殲滅するためではない、もっと根源的なものがそこにはあるようです。つまりここでは伸るか反るかの、賭けをするような烈しきで、イスラエルの全民族・全歴史が神と対峙しているのです。まさに彼らはこの時、<自分の神>を守るため、<真の神>を殺そうとしていたのです。

どのような形であれ、殺人には必ず、神を殺すに至る<意味>がそこにはあるのです。それこそが、自殺を含む殺人が<タブー>である理由です。つまり人間が神に模られたほどに神に愛された存在であること、それであり、その否定肯定にかかわらず殺人がタブーであり続ける中に、人間が<神の像>であることの証拠が、示されているように思われます。

さて、神の子を殺すということ、つまり人を殺すことは神を殺すことであると言う事実が初めて露わになることで狼狽える彼らは、しかし「祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。」(55・56)と聖書にあるように、後々まで自分たちの正当性を確保するため、それに相応しい証言を必要に求めようとします。しかし、立てられる証言は次々に崩されて行きました。

その事態を見て、それに見切りをつけた大祭司カヤパは立ち上がり、真ん中に進み出て、「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」(60)と、主イエスに直接尋問します。それでも沈黙のままの主イエスに苛立った大祭司は、その返答が得られるとは思ってはいなかったあの言葉、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(61)と言うこの言葉を、捨てゼリフのように主イエスに投げつけます。というのも、彼らの前に立つ主イエスの姿は、栄光と賛美が捧げられるにはほど遠いものだったからです。

しかしその時、主イエスの沈黙は破られます。主は「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」(62)と言われたのです。つまり、「お前はメシアなのか」との問いに、「そうだ。わたしだ。」と答える。自分が神から遣わされた者であることを言明した。それこそが、主イエスの<使命>だったからです。

ここで主イエスは、神を殺すことに非人間的なことのすべてが内包されていることを示されています。人間存在の土台と対峙される主、主イエスの死は、特定の人ではなく、すべての人間の存在に関わるものだからです。しかし、主イエスの言葉を聞いた大祭司は、自分の衣を引き裂き「これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は冒瀆の言葉を聞いた。」(63・64)と一同に言いました。

この時、彼はもはや主イエスを裁く裁判官ではなく<神>そのものとなっていました。そして彼のこの言葉を聞いた瞬間、最高法院の全員も<神>となって、主イエスの死刑を決議したのです。そして主の近くにおいて、主イエスを神の子と信じなかった者たちもまた、<神>となって主に唾を吐きかけ、拳で殴り、平手で打ったのでした。

人間が神にならない限り、殺人の理由には後ろめたさが残ります。しかし、かつての戦争の時、天皇は、否、我々は神になりました。そんな我が国で、今、戦争の足音が近づいて来る思いがします。キリスト教国アメリカでも、リバイバルが起こる時、戦争の近づく気配がします。そして、世界中のネオ・ナチの中に、ヒトラーが生き続けている気がします。つまり、主の御受難は人間の罪が露わにされる啓示ではないかと思えます。

受難節の今この時にこそ私たちは、人間とは何ぞや、神との関わりとは如何に、そして主イエスは私たちにとって何であるか、このことをもう一度考えなければならないと思うのです。(説教要約 羽入田悦子)